
異常で過不荷これってどうなのよ

谷野 一則

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異常で過不荷これってどうなのよ

【Nコード】

N2440V

【作者名】

谷野 一則

【あらすじ】

総合的な能力ならめだかや球磨川を超える実力を持つ天道明久の物語

第零箱

いま僕は箱庭学園の廊下を歩いている、何でいるかって？この学校に推薦で入学したいからその為の面接に来ているんだよ

「面接室はここかな？、失礼します」

俺は部屋を見つけたら直ぐ部屋の中に入った、入った時に俺が見たのは老人でとても面接官には見えなかった

「貴方が天道明久君ですね私はこの箱庭学園の理事長をやっている不知火袴といいます以後お見知りおきを」

へ？理事長！？何で僕みたいな人間に理事長自ら面接に来てんの

2

「突然で何ですがこのサイコロをまとめて振ってくれませんか？」

理事長が8つのサイコロを俺に渡してきた

「振るだけで良いんですね？」

そう言うと僕はサイコロを振った、サイコロは全部4の目で横に並んでいて亀裂が入っていた

「すみません理事長僕がサイコロをまとめて振るといつもこうなるんですよ」

少し間を置いてから理事長が

「合格です」

と告げてきた

「それだけで良いんですか」

つい聞いてしまった、気になったから別にいいけど

「構いませんよ、それで貴方が所属する組何ですが貴方は十組が良いと調査票に書かれていましたが十三組に所属して貰います」

「そうですか、分かりましたそれじゃあ僕はこの辺で失礼します、袴さん、それとこの部屋に隠れてる皆さんも『いつかまた会いましょう』」

そう言い残すと俺は面接室から出てそのまま玄関に足を進めた

く不知火袴 sideく

「これは当たりを引いたかも知れませんが、君等の存在に気付いているなんて」

私の後ろから3人の人間が出てきた

「そうかあ？偶然だろ」

「俺は帰る、いこうぜ古賀ちゃん」

おやおや随分帰りが早いですね

「雲仙君は帰らなくていいのですか？」

「俺は家に帰ってもお姉ちゃんしかいねえからな、それとあいつに興味を抱いた、あいつについて何か知ってる事あったら教えてくれないか」

彼についてそこまで追求するなんて興味を抱いたというのは本当のようですね

「おいおい冥利君一人じめは良くないぜ」

「おや、名瀬さんでしたか貴女はもう帰ったかと思いましたがよ、名瀬さんがいるということは古賀さんも一緒ですね？」

「いや、古賀ちゃんは先に帰ったよそれよりあいつの事だ、教えてもらおうか？」

「彼は恐らく裏ブラスシックスの六人に匹敵する程アブノーマルの異常ですよ」

雲仙君と名瀬さんが二人して驚いていた、まあしょうがないでしょう、何せあの裏ブラスシックスの六人に匹敵するほどの異常の持ち主なのですから。

「じゃあちよつと試してくるわ」

雲仙君が驚きの言葉を口にした

「冥利君気絶させて俺の所に連れてこい」

名瀬さんも解剖するきまんまんですね

「言われなくてもそのつもりだぜ、んじゃな」

颯爽と部屋から雲仙君が姿を消した、やりすぎないで下さいね

く不知火袴 side end く

「どこどこだろう」

どうしよう、迷ったあの部屋から出てすぐ迷った

「お前天道明久だな」

何か小柄な子供に声をかけられた、だけどその姿に見覚えがある、あの部屋にいた三人の中の一人だ、身長からして十歳くらいだろう飛び級かな？

「どうかしましたか先輩、僕は何もしてませんよ?。」

「変な喋り方しやがって、いきなりで何だがちよつと気絶してくれや」

先輩がいきなり攻撃してきた、つてかアップすると思ったら頭の上から衝撃が来たぞ、この先輩の攻撃方法は・・・まだ分からん、今とれる最良の手段は

- 1 ・反撃する
 - 2 ・土下座する
 - 3 ・謝る
 - 4 ・この場からダッシュで立ち去る
 - 5 ・僕のスキルを使ってボコボコにする
 - 6 ・大人しく気絶する
- どうしようよし答えは・・・

「即逃げる!!」

「あ!!おいこら待ちやがれ!!」

「すみません!!この続きは入学してからでお願いします、流石に入学前に問題起こすとか洒落になりません!!」

「うち!!しゃあねえな、入学式が終わったら問答無用で襲いに行くからな」

ああ良かったよし帰ろう・・・ん!?何か大事な事忘れてるような、まあいいか

「それじゃあ僕帰りますね」

「ああ、またな」

「そついえば僕の名前は知れてるのに僕、先輩の名前知らないんですよね教えてくれませんか?」

ダメ元で聞いてみたら

「今は駄目だ、そうだなお前が入学したときを楽しみにしてな」

やはり名前を覚えてくれなかった、入学式まで待つとしますか

「そんじゃあ帰ります」

「ちよつと待て」

先輩が俺を引き留めた

「？、どうかしましたか？」

「お前正面玄関の場所分かるのか？」

さっきのモヤモヤの意味がようやく分かった

「さっぱり分かりません」

正面玄関までの道をすっかり忘れてしまったのだ

「じゃあどうやって帰るんだ」

「僕のスキルを使います」

そついうと窓を開けた

「『それじゃあ僕はここから帰りますので入学式に会いましょう』」

と言うと窓から飛び降りた。先輩が驚いて窓の下を向いたがもう俺は校門の前に立っていた

「よし、帰ろう、晩飯どうしようかな、スーパーにでも行くか」

こうして波乱に満ちた学園生活の第一歩を歩み始めたのだった

まだ終わらないよ？

く雲仙 side へ

何なんだあいつの異常は俺の攻撃を受けても平気な面してたよな、あいつは理事長の言った通り裏の六人と同等の異常って事が分かったからそれだけでも収穫でいいよな

「さてと、名瀬の所でも行くか」

多分怒るだろうな

く雲仙 side end へ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2440v/>

異常で過不荷これってどうなのよ

2011年10月8日12時58分発行